

一 初めての昼の放送

給食の時間まで、あと十分だった。わたしは放送室のいすにすわって、原稿を何度も読み返していた。今日は初めて、一人で昼の放送をする日だった。

原稿は、来週の図書室の行事のお知らせと、今日の給食のこんだてだ。きのうの夜、家で十回以上も声に出して練習した。それなのに、さつきから同じ行ばかり目で追っている。

手がつめたくて、原稿のはしがかすかにふるえた。水とうのお茶を飲んでも、すぐにのどがかわく。かべの時計を見るたびに、針が少しも進んでいない気がした。

「千夏ちゃん、だいじょうぶ」

六年生の理沙さんが、ドアから顔を出した。放送委員長で、いつも落ち着いた声で話す人だ。

「……ぜんぜん、だいじょうぶじゃないです。まちがえたら、全校に聞こえちゃう」

言ったとたん、自分の声がうら返っていて、ますます顔が熱くなった。

理沙さんは笑って、となりのいすにすわった。そして、一冊の古いノートを開いて見せてくれた。ページのあちこちに、赤い字で書きこみがある。

「これ、わたしが五年生のときの放送ノート。ここ、見て」

指さされたところには、ふるえたような字で「名前をかんだ。最悪」と書いてあった。その下に、

「でも、だれも気づいていなかった。みんな給食に夢中」と続いていた。

わたしは思わずふき出した。あの理沙さんでも、かんだことがあるのだ。

「みんな、カレーのほうが大事なんだよ。千夏ちゃんの声は、おまけくらいでいいの」

理沙さんがそう言ったとき、ろうかからカレーのにおいがただよってきた。配ぜん車のがらという音も聞こえる。わたしは、ゆっくりと深く息をすった。

「……やってみます」

時計の針が、十二時二十分をさした。マイクのスイッチにのせた指は、まだ少しふるえていた。緊張は消えていない。けれど、むねのおくのどきどきが、さつきとはちがって少しだけ楽しかった。

わたしはスイッチを入れた。赤いランプがつく。

「みなさん、こんにちは。昼の放送の時間です」

一行目は、思っていたよりまっすぐな声が出た。三行目で一度だけつつかえたけれど、止まらずに読み続けた。

放送を終えてランプを消すと、ガラスの向こうで理沙さんが小さく手をたたいていた。わたしはほつとして、いすの背にもたれた。それから自分のノートを開き、一ページ目にこう書いた。

「三行目でつつかえた。でも、たぶんだれも気づいていない」

一 初めての昼の放送 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

二 近所の黒い犬

習字教室へ行くとちゅうに、大きな黒い犬のいる家がある。わたし、美羽^{みう}は、いつもその家の前を通らずに、一本向こうの道を回っていた。そのほうが、五分も長くかかるのに。

三年生のとき、その犬に、へいの向こうから大きな声でほえられた。わたしはしりもちをついて、習字道具を道にばらまいた。それから、遠くで犬の鳴き声が聞こえるだけで、足が止まってしまふ。

その日、いつもの回り道は、工事で通れなくなっていた。わたしはかどに立ったまま、しばらく動けなかった。黒い犬の家は、ほんの十メートル先だ。

習字バッグの持ち手を、両手でにぎりしめた。へいからいちばん遠い道のはしを、息を止めて早足で歩きはじめる。

家の前まで来たとき、空が急に暗くなった。遠くで、ごろごろと低い音がした。次のしゅんかん、門が開いて、黒い犬が飛び出してきた。

わたしはその場でかたまつた。声も出なかった。どきどきという音が耳の中でひびいて、ひざがぐがくとふるえた。

ところが、犬はわたしには目もくれず、道のまん中でふせてしまった。大きな体を丸めて、しつぽを後ろ足の間にはさんでいる。

「あら、ごめんなさいね。かみなりが鳴ると、こうなっちゃうのよ」

白いかみのおばあさんが、リードを持って家から出てきた。おばあさんは首輪にリードをつけようとしたが、犬は動こうとしない。

空が、もう一度光った。犬の背中が、びくりとはねた。よく見ると、太い前足が小さくふるえている。さっきのわたしのひざと、同じだった。

「この子、体は大きいけど、おくびようだね。知らない人にほえるのも、自分の家を守りたいからなの」

おばあさんの話を聞きながら、わたしは犬の顔を見た。黒い目が、上目づかいにわたしを見ていた。

わたしはそつとしやがんで、手のこうを犬の鼻の前に出してみた。指先は、まだ少しつめたかった。

犬はくんくんとおいをかいでから、ざらざらした舌^{した}で、わたしの指をぺろりとなめた。

「あら。この子が初めての人をなめるなんて、めずらしい」

わたしは、思わず笑ってしまった。ほつとしたのに、むねはまだ少しどきどきしている。あんなに遠回りしていた自分が、少しおかしかった。

かみなりは遠ざかって、雲のすき間から、うすい日がさしてきた。犬はゆっくり立ち上がり、おばあさんの足もとにすりよった。

「習字、がんばってね」

おばあさんに手をふって、わたしは歩きだした。少し行つてふり返ると、黒い犬がへいの前にすわつて、じつとこちらを見ていた。わたしは、もう一度手をふった。

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

三 一年生と山登り

子ども会の秋のハイキングで、陽太ようたは初めて班長になった。六年生は、一年生と二人で組むことになっている。陽太の相手は、近所に住む芽依めいという女の子だった。

芽依は、出発のときからお母さんのスカートをはなさなかった。陽太が「行こうか」と声をかけても、首を横にふるばかりだった。

山道に入ると、芽依はますます口をきかなくなった。陽太が先を歩くと、ずっと後ろのほうをとぼとぼついてくる。待っていると、ぴたりと止まる。

「つかれた。もう歩かない」

坂のとちゅうで、芽依はどうとうしゃがみこんだ。ほかの班は、どんどん先へ行ってしまう。木の間から、前の班のぼうしが小さく見えるだけになった。

陽太には、弟も妹もない。小さい子と話したことなど、ほとんどなかった。「がんばれ」と言うと、芽依は目にいっぱい涙をためた。「先生をよぶよ」と言うと、とうとう声を上げて泣きだした。

陽太は、ただとまどい、頭をかいて立っているしかなかった。風がふいて、頭の上で木の葉がざわざわと鳴った。うす暗い山道に、芽依の泣き声だけがひびいていた。

そのとき、陽太はふと、自分が一年生だったときのハイキングを思い出した。あのとき陽太も、この坂で泣いたのだ。六年生の男の子は何も言わずにとなりにしゃがんで、どんぐりを一つ、てのひらにのせてくれた。

陽太は芽依のとなりにしゃがんだ。足もとの落ち葉をかき分けると、ぼうしをかぶったどんぐりが、いくつも出てきた。

「ほら、これ。ぼうしつき」

芽依はしゃくり上げながら、陽太の手の中をのぞきこんだ。

「……こつちのぼうが、大きい」

芽依は、自分で一つ拾った。陽太がもう一つ見つけると、芽依も負けずにさがしはじめた。いつのまにか、泣き声は止まっていた。

「じゃあさ、てっぺんまでに、どっちがたくさん拾えるか競争しよう」

芽依はこくりとうなずいて、立ち上がった。そして、だまって陽太の手をにぎった。小さな手は、思っていたよりあたたかかった。

陽太は、少しくすぐったくて、少しうれしかった。二人はどんぐりを拾いながら、ゆっくり坂を登っていった。木の間から光がさしこんで、落ち葉の道を明るく照らしていた。

てっぺんに着くと、芽依はポケットいっぱいのどんぐりを、お母さんに見せに走っていった。

「班長さんといっしょに、拾ったの」

その声は、出発のときより、ずっと大きかった。

三 一年生と山登り 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

四 こげたハンバーグ

お母さんの誕生日の夕方、ぼくはお父さんと二人で台所に立っていた。お母さんには内しよで、夕飯にハンバーグを作るのだ。お母さんが仕事から帰るのは、七時の予定だった。

ところが、ひき肉をこねはじめたところで、お父さんの電話が鳴った。会社からだった。

「ごめん、蓮^{れん}。急ぎの仕事なんだ。三十分だけ、たのむ」

お父さんはパソコンを持って、となりの部屋に入ってしまった。台所には、ぼくと、ボウルいっぱいひき肉だけが残された。

時計を見ると、六時十分だった。料理の本を開いて、手順を指でなぞる。玉ねぎは、まだ切っていない。包丁を持つと、玉ねぎがまな板の上で転がって、なかなか切れない。目にしみて、なみだがにじんだ。

やつと形を作ってフライパンにならべたとき、時計は六時四十分をさしていた。ぼくは火を強くした。早く焼かないと、間に合わない。

じゅうじゅうという音が、だんだん大きくなる。ふたを開けると、こげくさいにおいがもわつと立ちのぼった。ひっくり返すと、ハンバーグの裏は、どれもまっ黒になっていた。

「うそだろ……」

手がすべって、フライ返しがゆかに落ちた。ひたいにあせがにじむ。時計の秒針の音が、いやに大きく聞こえた。外はもう暗く、窓ガラスにぼくのこわばった顔がうつっていた。

もう一度作るひき肉は、残っていない。ぼくは料理の本をめくったり、冷ぞう庫を開けたりした。何をさがしているのか、自分でもわからなかった。

そのとき、本の間から、古いメモが一まいすべり落ちた。お母さんの字だった。

「はじめてのハンバーグ。火が強すぎて、こがした。こげたところをけずって、ソースをたっぷりかけたら、おいしいと言ってもらえた」

日付は、ぼくが生まれる前のものだった。ぼくはメモを二回読んだ。それから、ふうつと長く息を吐いた。

ガスの火を止めて、包丁でこげたところをていねいにけずった。ケチャップとソースをまぜて、たっぷりかける。形はでこぼこだけど、においは悪くない。ぼくは少しほつとした。

「蓮、ごめん、終わった……あれ、もうできたのか」

部屋から出てきたお父さんが、目を丸くした。ぼくがメモを見せると、お父さんは声を上げて笑った。

「なつかしいなあ。これを食べたの、お父さんだよ。あのときのハンバーグ、本当にうまかったんだ」七時を少し過ぎて、げんかんのかぎが回る音がした。ぼくはお父さんと顔を見合わせた。こがしたのはくやしいのに、お母さんの顔を見るのが、なんだか楽しみだった。

テーブルの上では、でこぼこのハンバーグが、白いゆげを立てていた。

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

五 選手コースの初日

春から、七海^{ななみ}はスイミングクラブの選手コースに入ることになった。冬の記録会のあとで、コーチにさそわれたのだ。さそわれた日は、家まで走って帰るほどうれしかった。その夜は、新しい水着をまくらもとに置いてねむった。

初めての練習の日、七海はプールサイドに立ったまま、すぐには動けなかった。

選手コースの人たちは、ほとんどが中学生だった。みんな七海より頭一つ大きく、かたはばも広い。そろいの青いぼうしをかぶっている。七海のぼうしだけが、ジュニアコースの黄色だった。

中学生たちは、大きな声で笑いながら、次々に水に飛びこんでいった。水しぶきの音が、天井の高いプールいっぱいにはびく。コーチの笛が鳴るたびに、列がいつせいにスタートしていく。

七海はタオルをかたにかけたまま、プールのすみのベンチにすわった。いつもの見なれたプールなのに、今日は水がずっと深く見えた。黄色いぼうしのゴムを、何度も引っぱっては直した。

「黄色いぼうしの子、新しい子だね」

声をかけてきたのは、すぐ前のコースで泳いでいた中学生だった。ゴーグルをおでこに上げると、日に焼けた顔で笑った。

「わたし、美帆^{みほ}。同じ練習コースだよ。入らないの」

「五年の、七海です。……みんな、速そうだから」

それだけ言うのが、やっとだった。年上ばかりの中に入っていく気おくれが、足をベンチにくぎづけにしていた。

美帆さんはプールのへりに両ひじをついて、少し考えるような顔をした。

「わたしもね、五年生でここに来たとき、一番おそかったよ。三か月くらい、毎回みんなに一周おいていかれた」

「美帆さんが、ですか」

「そう。でもね、コーチは今速い子をさそうんじゃないんだって。これからのびる子をさそうんだって。だから、七海ちゃんもだいじょうぶ」

七海は、にぎりしめていたタオルを、ゆつくりベンチに置いた。

立ち上がって、黄色いぼうしをかぶり直す。ゴーグルをつけると、青い水の底で、天井のライトがゆらゆらと光っていた。

七海は深く息をすって、プールに飛びこんだ。つめたい水が、全身をつつんだ。

一本目の二十五メートルで、七海は中学生たちに大きくはなされた。それでも、かべにタッチして顔を上げると、美帆さんがとなりのコースから親指を立てていた。

七海は息を切らしながら、少しはずかしくて、でもうれしくて笑った。そして、かべをけって、次の一本を泳ぎだした。

五 選手コースの初日 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

六 一人で乗るかえ

夏休み、結衣は初めて一人で電車に乗って、おばあちゃんの家へ向かった。お母さんが書いてくれたメモには、乗るかえの駅と、ホームの番号が書いてある。

最初の電車は、思っていたよりかんたんだった。窓の外の景色をながめているうちに、乗るかえの駅に着いた。

ところが、ホームに下りたとたん、結衣は立ち止まった。

大きな駅だった。人の波があちこちから流れてきて、またあちこちへ消えていく。アナウンスと発車のベルが重なって、何を言っているのか聞き取れない。結衣は人にぶつからないように、柱のかげに入った。

メモには、乗るかえは「五番線」とある。けれど、まわりの案内板のどこにも、五番線の文字が見つからない。結衣は、メモと案内板を何度も見比べた。リュックのひもをにぎる手が、じつとりと止めてきた。

天井の高い通路に、たくさんの足音がひびいていた。だれもが行き先を知っているように、まっすぐ歩いていく。その中で、結衣だけが止まっていた。

お母さんに電話をかけようとして、結衣は手を止めた。一人で行けると言い張ったのは、自分だった。

そのとき、すぐそばで、だれかが鼻をすする音がした。

見ると、一年生くらいの男の子が、切符をにぎりしめて立っていた。ぼうしのつばの下で、目が赤くなっている。

「どうしたの」

「……おばあちゃんちに行くの。でも、ホームがわかんない」

男の子の切符には、結衣と同じ駅の名前が書いてあった。結衣は、思わず背すじをのびした。

「わたしもそこに行くの。いっしょにさがそう」

結衣は男の子の手を取って、近くにいた駅員さんのところへ行った。さっきまでは、人に聞くことさえ思いつかなかったのに、今度はすぐに足が動いた。

「五番線は、階段を下りて、地下の通路の先だよ」

駅員さんが指さした階段を、二人で下りた。男の子の手は小さくて、少しあせばんでいた。結衣は、その手をはなさないように、しっかりとぎった。

五番線のホームに着くと、ちょうど電車が入ってくるところだった。ならんで座席にすわると、男の子は大きく息をついて、結衣を見上げた。

「お姉ちゃん、すごいね。一人で来たの」

「うん。まあね」

結衣は少しむねをはって答えた。ほっとしたような、くすぐったいような気持ちだった。さっきまで足がすくんでいたことは、だまっておいた。

電車が動きだすと、窓の外に、明るい夏の田んぼが広がりはじめた。

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。
